

高等学校「課題研究」における 情報活用能力を高める実践研究

学籍番号 189988
氏名 水野 真
主指導教員 中西修一

1. はじめに

1.1 背景と目的

新学習指導要領では「学習の基盤となる資質・能力」として情報活用能力が挙げられた。初めて情報活用能力が定義されたのは1986年の臨時教育審議会答申（第二次）である。臨教審では情報活用能力を読み、書き、算盤と同等の基礎・基本になるものとして「情報及び情報手段を主体的に選択し活用していくための個人の基礎的な資質」と表現し、これ以降の学習指導要領を始めとする答申や報告で情報活用能力の定義や観点等が適宜示されてきた。中教審答申では「世の中の様々な事象を情報とその結び付きとしてとらえ、情報及び情報技術を適切かつ効率的に活用して問題を発見・解決したり自分の考えを形成したりしていくために必要な資質・能力」と説明されている。

このような状況の中で各教科において情報活用能力の研究は進められているが、中学校や高校の探究型学習の象徴的な「総合的な学習の時間」や「課題研究」では、登本ほか（2016）が挙げられるが数少ない。そのため、実習校で展開されている課題研究において情報活用能力の向上をめざし、生徒の実態や学校の特徴を踏まえて、年間を通して授業やその他の活動に取り組むこととした。

1.2 研究方針

情報活用能力はその時々々の社会情勢によって定義が変化している。また、その内容に関しても整理が繰り返されている。そのため、本研究では質問紙調査や項目がすでに明らかになっている情報活用スキルに注目する。本来、情報活用スキルは塩谷・堀田（2008a）の2人の研究者によって学校図書館の「学習・情報センター」の機能開発のために行われてきた。しかし、近年では探究型学習や主体的・対話的で深い学びでその技術的基盤となる力として情報活用スキルが用いられるようになってきた（登本ほか2015, 2016）。その中で行われている質問紙調査では10の指導項目に分けられており、それらをさらに各3ステップに分けている。筆者はこの質問紙調査が探究のプロセス（「課題の設定」「情報の収集」「整理・分析」「まとめ・表現」）に整理することができると考えた。

2. 実習校の特徴を捉えた実践研究

2.1 フィールド（実習校）概要

実習校は実習期間中にGLHS（大阪府教育庁）、SGH、WWL（ともに文部科学省）の指定を受けており、府内の公立学校を牽引する役割を担っている。授業時間が1限65分制を採用し、文理学科という専門学科を置き弾力的なカリキュラム編成を行っている。特にグローバル人材の育成に注力し、実習を行った課題研究では国際的な視野で研究を行うようなテーマ設定を心がけている。

2.2 発展課題実習の実践

発展課題実習では課題研究の授業を年間を通して2グループを長期的に担当させていただいた。担当講座は「医療の地域性」に関するテーマで研究を行うこととなった。探究のプロセス（「課題の設定」→「情報の収集」→「整理・分析」→「まとめ・発表」）に基づき、年間の授業計画を作成した（表）。そして、この中で「情報活用能力の向上に向けた授業実践」と「情報活用能力が向上したかを図る効果測定」を実施した。

授業実践については、情報の収集を中心に行った。基本学校実習での経験から課題研究は大学生同等もしくはそれ以上の研究を行うと予想されたため、学術的に必要な知識・技能の習得を優先的に行った。その後、探究のプロセスにおいて、適宜、信頼できるデータを用いているか、出典の記載方法などの指導を行った。

表 年間授業計画（略）

日程	探究のプロセス
4月	授業開始
	課題の設定 ↓ 情報の収集 ↓ 整理・分析 ↓ まとめ・発表
9月	課題研究中間発表会
	課題の設定 ↓ 情報の収集 ↓ 整理・分析 ↓ まとめ・発表
2月	課題研究最終発表会

筆者作成

2.3 発展課題実習の成果

成果を数値として表現するため先述した情報活用スキル質問紙調査とルーブリック評価を行った。情報活用スキル質問紙調査は年間を通しての変容を測るため、課題研究中間発表会までに全4回実施した。両グループともに全体として習得率が10ポイント以上向上し、スキルの向上を図ることができた。また、順を追うごとに上昇を確認することができた。そして、成果として探究のプロセスに対応した情報活用スキルの項目の向上を確認できたことが挙げられる。ただし、初回の調査から情報活用スキルの習得率は高い状況にあり、生徒の実態に合った質問紙調査ではなかった可能性が示唆される結果となった。ルーブリック評価では中間発表会で学校として行われたルーブリック評価から情報活用能力に関わると考えられる項目を筆者が選び、独自に評価を行った。分析力と論理性の項目で評価の上昇を確認できたが、その他の項目で目立った特徴を捉えることはできなかった。

3. 実践の総括

本実践課題研究では生徒の情報活用能力を年間を通じた探究型学習の中で向上をめざした。年間計画の中で探究のプロセスに着目し、各プロセスで生徒にガイダンスや指導を行った。生徒の情報活用能力の向上のために暗中模索するという教員側もまさに探究する状況だった。長期的な実習の中で生徒の情報活用能力の習得のわずかな変容を見逃さないために、こまめな質問紙調査を実施し注視した。結果として情報活用能力（特に情報活用スキル）の向上のためには生徒の得手不得手を的確に判断することが教員に求められると筆者なりに結論付けることができた。

最終章では、本報告での経験からこれからの生徒が生きる時代であるグローバル社会で必要な学びについて提言した。知識基盤社会や Society5.0 という超スマート社会で筆者自身も教職を行っていくことになるが、連合教職大学院2年間の経験を忘れずに、生徒ともに「学び続ける」姿勢を貫いていきたい。